

# 「新聞の投書を読み比べよう」(東京書籍・6年上)の授業プラン

栗原小学校 浅貝 祥輝

## (1) 教材について

平成23年度になり新学習指導要領の全面実施が始まった。新学習指導要領の国語科では、新聞の積極的な活用が謳われている。それに伴い、新たに出版された教科書にも新聞を教材とした単元が設けられている。本稿では、東京書籍6年上に掲載された「新聞投書を読み比べよう」の授業計画を提案する。

初めてこの教材を一読したときに、違和感を感じた。それは、普段目にする新聞の投稿欄とは様子が違うからだ。多くの新聞の投書欄には、1つのテーマに沿って投稿がなされていない。多様なジャンルの意見が掲載されているのである。例えば2011年4月14日付けの読売新聞に掲載された投書の見出しには次のようなものがある。「すてきな出会いがありますように」、「銭湯は日本文化 存続してほしい」、「『月曜は休むな』母の教えに感謝」、「被災地に届けるお金ためてます」、「東北の産品買い経済的な応援を」。東日本大震災に関わる投書が2つあるが、それ以外の投書には一貫性がない。そこで本教材の工夫が見られるのは、テーマが一貫した投書を時系列で紹介することで、同じテーマで異なる考えの投書の比べ読みができるようになっている。

そこで本教材については、児童は比べる視点を明確にしながらか読むことができる、と考えた。投書①「限界をこえた投球には疑問」では、「スポーツは楽しみながら適度に行うものである。」という考えを読者に訴えている。それに対し投書②では「勝利のためならある程度の負担は必要である。」と反論している。さらに、投書③・④ではそれぞれの二つの投書に対して、他の読者がそれぞれ感じた共感を同日に再度投書にしている。つまり、単なる意見文の連続ではなく、誰かの意見に「共感すること・違う考えを持つこと」の姿を本教材が示唆していることを子どもに気づかせたい。投書をした者は、情報の発信者であると同時に、読者であることや、相手の意見や考えがあるからこそ、自分も考えるきっかけが生まれることを知らせたい。

## (2) 学習目標について

### ① 価値目標について

国語科「読むこと オ」では、「本や文章を読んで考えたことを発表しあい、自分の考えを広げたり深めたりすること。」が指導事項になっている。

小学校第5学年及び第6学年の道徳の内容では、「2 主として他の人とのかかわりに関すること」において「(4) 謙虚な心もち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること。」と示されている。

児童が意見や主張を持ったときに、別の立場に立ってそれらについて考えることが「考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる」ことにつながると考える。この単元は、まさにそれを実践できる絶好の機会と言えるだろう。教材文では、「スポーツがどうあるべきか」について4人の投書が挙げられる。加えてこれらの投書は、投稿された順に掲載され、それぞれの意見が前の投書を踏まえて書かれたものになっている。そのため、児童は読むと同時に、それらの意見の関わりについて考えることができる。

自分たちが意見を発信するとき、受信する相手がいることも考えさせたい。新聞を単に情報の発信源と捉えるのではなく、それを読む多くの受信者がいて、また、自分たちも投書という形で発信源になることができ、さらにはそれが社会参加になることを、この単元を通して気付いてほしい。そこで、価値目標として「自分とは異なる意見や立場を大切にしながら、投書を読んで考えたことを発表しあい、自分の考えを広げたり深めたりする。」を設定したい。

### ② 技能目標

#### (ア) 関連する学習指導要領の目標

第5学年及び第6学年のC 読むことの指導事項における効果的な読み方に関する指導事項のイでは「目的に応じて、本や文章を比べて読むなどの効果的な読み方を工夫すること」を示している。また、ウでは「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを

明確にしながら読んだりすること。」が示されている。

また、オ「自分の考えの形成及び交流に関する指導事項」では、「本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。」とカ「目的に応じた読書に関する指導事項」では「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと」が挙げられている。

さらに、第5学年及び第6学年「読むこと」の言語活動例では、「イ 自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること」では「意見や解説の文章は、書き手の立場や考え方が強く反映しているので、それらに注意して読み、自分との相違点などに注意して利用することが重要である。」とある。

以上を根拠に本単元の技能目標を考えることとする。

#### (イ) 教材に即して学習指導要領の目標を改変した目標

本単元において上述した学習指導要領をもとにさらに絞って考えてみる。

本教材文の中に、次のような文章がある。

新聞投書を読むときは、書き手の意見や主張を読み取るだけでなく、根拠としてどのような事実や資料が使われ、どのように理由が述べられているかを考えることも大切です。そうして、理由づけの仕方や根拠の挙げ方に説得力があるかどうか、書き手の意見や主張に対してどう思うか、自分の考えをしっかりと持つようにしましょう。

この文章に、本単元・本教材が期待する児童像が描かれているのだろう。

以上のようなことから考えて、私は本単元の技能目標を「効果的な読み方の工夫をし、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえ、事実と感想、意見などとの関係を押さえることで、自分の考えを明確にしながら読むこと。さらにそれらを交流することで、自分の考えを広げたり深めたりすること。」と設定したい。

つまり、投書を読むことで、その文章の妥当性を考え、「自分が納得するかどうか」を児童が考えなければならない。また、納得したのであるのならば、文章中からその「理由付けの仕方や根拠の挙げ方」を的確に導き、説明する児童を育てることが目標であると言えよう。

#### ③態度目標

②で述べたことから、態度目標を「投書や意見文を読むことに前向きな姿勢を持ち、自分が納得出来るかどうかを考えながら読むことができる。」と設定した。

#### (3) 言語活動と活動目標

##### ①活動目標

本単元での活動目標を「納得する投書でパネルディスカッションをして、友達にも『納得した!』と言ってもらおう。」とした。この活動目標に向かうために次のような言語活動を設定した。

##### ②言語活動

(ア) テーマ(「スポーツがどうあるべきか」)について、児童の意見や思いがあることを確認する。新聞投書をもとにポスターセッションをする計画を立てる。(第1時)

(イ) 4つの投書を読み、文章構成が同じであることを確かめる。(第2時)

(ウ) それぞれの投書の意見や主張、読み手を説得するための理由付けの仕方や根拠の挙げ方の工夫を知る。(第3時)

(エ) 4つの投書から、自分の納得する投書を選び、その納得した観点整理し、パネルに表す。(第4時)

(オ) ポスターセッションを行い、交流する。(第5時)

(カ) ポスターセッションの振り返りを行い、新聞から児童一人ひとりが選んだ投書を学習したことを意識しながら読む。(第6時)

#### (4) 方法と評価

活動目標＝単元名(新聞の投書を読み比べよう) 全6時間

	言語活動	学習目標	評価方法
導入	投書①を読み、スポーツについて話し合う。それぞれの児童が意見や思いを持っていることを確認する。ポスターセッションをする計画を立てる。	(態度目標の形成) 投書や意見文を読むことに前向きな姿勢を持ち、自分が納得出来るかどうかを考えながら読むことができる。	発表
展開	新聞投書について紹介し、教科書の4つの投書を読みそれぞれの文章構成に気づく。(第2時)	(技能目標形成) どの投書も、文章構成が「話題の提示」・「書き手の意見や主張」・「第一の理由や根拠」・「第二の理由や根拠」・「予想される反対意見に対する反論」・「書き手の考え」になっていることを知る。	ノート・ワークシート
	それぞれの投書の意見や主張、読み手を説得するための理由付けの仕方や根拠の挙げ方の工夫を知る。(第3時)	比べ読みをすることで読みの姿勢を身につける。 投書の意見や主張、読み手を説得するための理由付けの仕方や根拠の挙げ方の工夫がどれに当たるか、次から選ぶ。 ・自分の経験を述べる ・見たり聞いたりしたことをのべる ・資料にもとづく具体的なデータを使う ・有名な人の言葉を引用する	ノート・発表
	4つの投書から、自分の納得する投書を選び、その納得した観点整理し、パネルに表す。(第4時)	四つの投書の中から自分が納得できる意見や主張を述べているものを選ぶ。 自分の選んだ投書の文章構成となぜ自分が納得したのかという理由をパネルに表す。	ワークシート
	ポスターセッションを行い、交流する。(第5時)	評価カードを用い、友達の発表を聞きながら、考えを深める。 また、友達の意見を聞いて、自分とは異なる立場でも、共感し視野が広がる発表であれば、感想として気づきを書く。	発表

<p>終結</p>	<p>ポスターセッションの振り返りを行う。児童一人ひとりが新聞から投書を選ぶ。選んだ投書を学習したことを意識しながら読む。(第6時)</p>	<p>(価値目標形成) 自分とは異なる意見や立場を大切にしながら、投書を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすることができたかを振り返る。</p>	<p>ノート</p>
-----------	--	--	------------

### (5) おわりに

本稿の(2)において、投書を読むことは社会参加につながると書いた。私は、本単元を計画することを通して、教科書がきっかけとなって子どもが自発的に新聞をめくり、投書を読む姿を「社会参加」への第一歩ではないかと思うようになった。その原動力となるのは、授業を通して習得した技術を用いて読みたいと思う意欲と、自分の考え以外にもいろいろな考え方が世の中にはあることに気づき、その多様性に興味や関心を持つことではないだろうか。この二つの原動力が生まれるような授業を行う環境は、児童同士がその存在を認め合う学級集団であると考え、「国語を教える」ことと、「国語で教える」ことの両方を意識して教壇に立ちたい。